

# 「さとり世代」と「少欲知足」

高 佐 宣 長

## 一

最近、「さとり世代」という言葉が、使われ始めているようです（平成二十五年十月三十日の口頭発表後、その年の暮れの「ユーキャン新語・流行語大賞」にノミネートされました）。

日本経済新聞産業地域研究所の山岡拓が、平成二十一年十二月八日付で、『欲しがらない若者たち』という書物を出版しました。この本について、インターネット上の掲示板でのスレッドが立ち上がり、その中で初めて「さとり世代」という言葉が書き込まれたと言われています。

そして、「2ちゃんねる」という有名なインターネット上の掲示板の元管理人の、ひろゆきが、平成二十二年二月二日午前十一時十二分に、「Twitterというインターネット上の情報サービスを使って、「さとり世代」について

ゆとり世代の次。結果のわかっていることに手を出さない。草食系。過程より結果を重視。浪費をしないと書き込んでいます。

世代論、或いは、若者論に分類することが出来ることばです。「ゆとり教育」が提唱されて、平成四年（高等学校は平成五年）に学習指導要領が改訂施行されました。その新学習指導要領に基づいた教育を受けてきた世代、つまり、おおよそ昭和六十二年から平成十六年（狭義には平成八年）生まれまでの世代が「ゆとり世代」と呼称されています。

この「ゆとり世代」の別称、もしくは、その次の世代の呼称として、「さとり世代」ということはが用いられつつあるようです。

口頭発表日の三週間前に、博報堂若者研究所の原田曜平が、『さとり世代 盗んだバイクで走り出さない若者たち』という書物を出版しました（平成二十五年十月九日刊）。それによれば、「さとり世代」については、「ゆとり世代」の次の世代を言うとする、先述のひろゆきなどの説と、「ゆとり世代」の言い換えとして用いるという説の二つがあり、原田は後者の立場に立つとしています。

また、口頭発表の前日、マーケティング評論家の牛窪恵は『大人が知らない「さとり」世代の消費とホンネ』を刊行しましたが、その帯には、「『さとり世代』（17歳〜26歳）にヒットしている『なんだコレ!』の商品群から『次の市場を開くカギ』が見えてくる!』とありましたので、牛窪も狭義の方の「ゆとり世代」の言い換えとして、「さとり世代」の語を用いているようです。

東京大学大学院在学中の社会学者の古市憲寿は、『絶望の国の幸福な若者たち』に於いて、若者という言葉の定義から検討し、若者論を展開することの困難さを指摘、各種の若者論をなで切りにしながら若者論を取り扱うという業を見せています。古市の主張には尤もなところがあるとは思われますが、小稿は、若者論や世代論そのものを論ずることを目的とするものではありませんので、厳密な定義付けを行わず、「さとり世代」と呼ばれる特徴を有する現代の若者世代がいるらしい、という認識を前提として議論を進めます。

さて、インターネット上などでは「さとり世代」には、次のような特徴があるとされています。

- ・ 車に乗らない
- ・ ブランド服を欲しがらない

- ・ スポーツをしない
- ・ 酒を飲まない
- ・ 旅行をしない
- ・ 恋愛に淡泊
- ・ 貯金だけが増えていく
- ・ DVDの新作をレンタルすると贅沢した気分になる
- ・ 自分で納得したものにお金を出す

おおむね山岡拓が『欲しがらない若者たち』に於いて取り上げたような点が言われているようです。

古市憲寿は、こうした「さとり世代」の特徴とされることについて、車に乗らないとか、物を買わないとかいうのは本当だろうか、と疑問を呈します。本当か、と申しますか、車に乗らないことを、なぜ、そんなに問題にするのだろうか、といった筆致です。お金を使わないということについても、疑問を投げ掛けます。しかし、その上で、現代日本の若者は、おおむね、現状はさほど恵まれた状態にはないのに幸福感を持っている、と総括しています。『絶望の国の幸福な若者たち』というタイトルに示される通りです。

諦という文字があります。諦は、佛教語として真理という意味を持つと同時に、アキラメという意味の文字でもあるわけですが、そうした文脈での、悟ってしまっている世代という表現のされ方が、「さとり世代」というネーミングに出て来ていると古市は分析しています。別の言い方をすると、まさに「少欲知足」を実践している世代であると。実践しているというのは、別に、意識して、或るいは意志を持ってそうしようとしてしているのではなくて、自然にそうしている、そうなっている。そういう人たちが、現代日本の若い人たちの中にふえてきているようだと言うのです。

実際、現代の若者の生活満足度や幸福度は、ここ四十年間の中で一番高いことが、様々な調査から明らかになっている。

例えば内閣府の「国民生活に関する世論調査」によれば二〇一〇年の時点で二十代の七〇・五%が現在の生活に「満足」していると答えている。そう、格差社会や世代間格差と言われながら、日本の若者の七割が今の生活に満足しているのだ。

若者に広まっているのは、もっと身近な人々との関係や、小さな幸せを大切にする価値観である。「今日よりも明日が良くなる」なんて思わない。日本経済の再生なんてことは願わない。革命を望むわけでもない。成熟した現代の社会に、ふさわしい生き方と言ってもいい。

古市憲寿は、右の引用に見られるように、「さとり世代」のあり方を相当程度肯定的に捉えています。しかし、果たして、本当にそれは、「成熟した現代の社会に、ふさわしい生き方」なのでしょうか。

まあ、どちらにしても子どもはすぐには増えないし、過去の政策を批判しても日本の現状が変わるわけではない。そして世代間の格差が問題の本質ではないとしても、日本の未来が絶望的なことに変わりない。

結局、その絶望的な未来を、より長く生きて行かなくちゃいけないのは、若者や子どもたちであることも間違っていない。

日本が格差の固定された階級社会や、身分制社会になってしまったほうが、多くの人にとって幸せなんじゃないか

というようなことまで古市は言います。反語的に言っているのでもなさそうです。

もちろん、「さとり世代」の人たちが、総じて、階級社会、身分制社会の方が幸福であると主張している、というようなことではありませんけれども、さとり世代の一人であり、代表的論客である古市が、さとり世代のさとり世代的な在り方を肯定的に評価しつつ分析すると、そういう結論になってしまう。そういう問題性がさとり世代にはある、ということになるのかと思われまます。

尤も、この話には、少々註釈が必要であるかもしれません。古市は、幸せの条件を経済的な問題と承認の問題であると捉えるのですが、その問題を論じながら、中国での事例を紹介しています。

中国での、農村からの出稼ぎ労働者を対象にした調査では、彼らの生活満足度は八五・六パーセントである、というのです。農村から都市に出稼ぎに出ている人は、非常に劣悪な環境に置かれていることは分明であるにもかかわらず、八五パーセントの人がその生活に満足をしている。何故か。それは、農村にいと、もっとひどい生活を強いられるからである、ということなのだそうです。都市の出稼ぎ労働者の生活は劣悪であるけれども、農村での生活水準よりはましだから。

また、中国の場合は、都市戸籍と農民戸籍とに分けられていて、農民戸籍の人に対する差別というものがある。それに対して、それは国家の制度であり、変えようがないので、どうせ戸籍が違うから自分はどうしようもないという諦めが生まれ、その結果、劣悪な状況に満足ができる。仕方がないという諦めがあり、そこに満足が生まれる、とい

うことです。こうした状況を受けて、中国における農民工の生活満足度の高さ、アリ族の満足度の低さという現況がある（アリ族は、都市の高学歴ワーキング・プアのことを言うそうです）。

こうしたことから、古市は、日本も格差の露呈された階級社会や身分制社会などになってしまった方が、多くの人にとって幸せ、つまり、満足が得られるのではないか、という分析をしているわけです。

因みに、今年（平成二十五年）の九月九日（米国時間）に、国連の持続可能な開発ソリューション・ネットワーク（Sustainable Development Solutions Network）は、世界百五十六カ国を対象とした幸福な国ランキング「2013 World Happiest Report」を発表しました。

世界中の国々を、国民一人あたりの実質GDP（国内総生産）、健康寿命、社会的支援、人生選択の自由度、汚職レベルの低さ、寛容度などを変数として幸福度を割り出したもので、トップはデンマーク、ノルウェーとスイスがそれに続き、カナダが六位に、メキシコ（十六位）がアメリカ（十七位）を上回り、アジアでは、シンガポールがトップで三十位、タイが三十六位、韓国四十一位、台湾四十二位、日本は四十三位だったそうです。

こうした調査にどこまでの有為性があるのかは、議論のあるところであろうと思いますし、どの項目を比較するか、それをどう調査し、どう評価するのか、という方法によって、違った結果が生まれて来るであろうとは思いますが、しかし、国連の機関が初めて発表したものでもあり、考慮の中に入れておかなければならないであろうと考えます。つまり、世界の客観基準からみると、現在の日本は、決して胸を張れるほどは幸福な国ではないらしい、という自覚を、私たちは持たねばならないようです。

最近、件の島田裕巳が、『プア充』という著書を出版しました（『プア充 ―高収入は、要らない―』（平成二十五年八月二十日刊））。

インターネット上で使われている「リア充」（リアルな生活が充実している、の謂い。現実生活が充実していて、その充実ぶりをSNSなどで発信している人などのことをこのように呼んでいるようです）という言葉をもじって、島田は、貧しいけれど充実している生き方、在り方を「プア充」と名付けて、この線で行こうではないか、という提案をしています。年収三百万円だから豊かな生活ができる。「年収三百万円でも」ではなく、「年収三百万円だからこそ」「三百万円の方が」豊かな生活ができるのだと主張しています。

島田は、過去にオウム問題でバッシングを受けたときに、年収二百万円を切った年もあったのだそう、そうした体験にも基づきながら、このような主張を展開するとしています。それが本当に豊かな生活であると考えるのであれば、その生活を続ければ良いと思うのですが、御本人は、年収三百万円の生活からはとくに脱却しながら、「年収三百万円だからこそその豊かな生活」を提唱しているようです。

小説の体裁を採っているのですが、章ごとに「プア充」たることの要件としてのまとめが付いております。そこから幾つか引用してみます。

・プア充は、その「少欲知足」の思想を、現代の日本に適した形にアレンジしたもの。収入が低いからこそ、豊かに安定した生活ができて、楽しく幸せに生きられるという考え方

・実は現代の日本は、年収三百万円くらいが最も幸せに暮らしていける社会だ

- ・ お金は、あればあるほど欲しいものが増えていき、お金に対する執着や欲望、不安は増す
- ・ 今の日本は、物質的には十分豊かになっていて、これ以上成長の必要はない
- ・ 競争とは無縁で安定している、古くてださい会社で働くべき
- ・ 仕事にやりがいを求める必要はない
- ・ 地方は一人暮らし用物件が少なく、車も必要になるので、むしろ都会に住むべき
- ・ お金のかからない暮らしをするには、「外食をしない」「規則正しい生活をする」「ストレスをためない」の三つがポイント
- ・ お金がない人こそ、結婚して子どもをつくるべき
- ・ 現代人は、未来のことを心配しすぎ。ネガティブな未来を想像することが負担になってしまっている
- ・ 先の分からない未来を不安に思うことに意味はない

もしかすると、オウム問題でバッシングされて収入が少なかった時と比して、現在は『葬式は、要らない』などのベストセラーを書いてしまったせいで、島田は「お金に対する執着や欲望、不安が増」した不幸な生活をしているのかもしれないが、それはともかくとして、「さとり世代」の生き方、在り方と、「プア充」に描かれているような生き方、考え方は、かなり近接すると言うか、共通するところがあるように思われます。

『プア充』自体も、ゆとり世代に属する人物を主人公として描かれている作品であり、時宜を得たということでしょうか、「SAPIO」という雑誌の今年の十一月号が「プア充の時代がやってきた」と特集を組んで取り上げました。

とは言え、同誌では、大前研一が「人間力の時代」と題して連載記事を書いており、同号の中で「プア充」批判を



展開してもいます。

しかし、多くの人が「プア充でいい」と考える社会は活力を失う。なぜなら、プア充が増えれば、当然のことながら付加価値を生み出す人が少なくなるからである。

しかも、プア充は税金をあまり納めてくれない人々なので、社会的には負担となるばかりだ。

社会を維持するコストを負担するのは勤労者だけなのに、負担する気のない「ぶら下がり」の国民が増えていくという現象が長続きするわけではないのである。

稼ぐ力というのは究極的にはアンビション（野心）がモノを言う。もっと良いものを作りたい、もっと喜ばれるサービスを提供したい、その結果、今よりも大きな仕事を任せられるような人材になりたい、という欲求こそが「稼ぐ力」につながるのである。

大前の主張の全てが正しいとも思いませんが、古市も島田も、要するに「現代日本社会はそこそこ良い世の中であり、お金を使わなくても、それなりの生活ができるから、それで良いではないか」という考え方が基本にあることは間違いないようです。しかし、そうした生き方、考え方の人で日本社会が充満することになると、大前の言う如く、この豊かな社会は維持できないということにもなりかねません。「ぶら下がり」の国民が増える現象は、「社会的には負担」となり、サステイナブルではないのではないか、ということに対する批判的な観点が、さとり世代肯定論には、欠落しているように思われます。それでは世の中は成り立って行かないのではないか。今はいいかもしれませぬけれ

ども、先々、それでは成り立たなくなるのでないか。島田に言わせれば、いやいや「現代人は、未来のことを心配しすぎ。ネガティブな未来を想像することが負担になってしまっている」「先の分らない未来を不安に思うことに意味はない」と、先のことは悩まず、そのうち何とかなるだろう、なるようになるで生きて行けばイイ、ということになるでしょうが、本当にそれで良いのでしょうか。

そうした生き方をしている人たちが、さとり世代と呼ばれ、「少欲知足」の実践者だということになってしまっているのです。

### 三

さとり世代は、確かに「少欲知足」の実践者としての面を持つているように思われます。

「少欲知足」は、申すまでもなく、佛教者の間でとても人気の高い言葉で、否定的に仰る方がほとんどありません。さとり世代の人たちに向かって「少欲知足」を言うということは、「今のままでいい」と言ってあげるということになり、元気づけることになると言えなくもないかもしれない一方で、「今さら、何言ってるの？そんなこと、とっくにやってるよ。少欲知足じゃないのは、坊さんの方なんじゃないの？」と言われかねないようなところもあるのではないかと思われます。

平成十一年九月、「環境問題への理解と対応」をテーマとして中央教研が、清澄寺研修会館に於いて開催されましたが、この際、「み仏の世界の実現をめざしてー環境問題の理解と対応に関するアピール文ー」が採択されました。

当該アピール文が収録されている「現代宗教研究」には、「註・本アピール文は第三二回日蓮宗中央教化研究会議最終日全体会において賛成多数で可決されたものですが、少数の反対意見もあったことを付記します。」と記載され

ています。

この時、反対意見を表明したのは、当時東京東部の教研運営委員として参加していた筆者であったのですが、これは、アピール文採択の手続き、プロセスに対する異議が主たるものであったのですけれども、内容的には、少欲知足が法華経や日蓮聖人の中心思想であるのかどうか、という異議申し立てでありました。

法華経に於いて、少欲知足が説かれているのは、普賢菩薩勸発品第二十八の一箇所のみです。

普賢。若有受持読誦。正憶念。修習書写。是法華経者。当知是人。則見釈迦牟尼仏。如従仏口。聞此經典。当知是人。供養釈迦牟尼仏。当知是人。仏讚善哉。当知是人。為釈迦牟尼仏。手摩其頭。当知是人。為釈迦牟尼仏。衣之所覆。如是之人。不復貪著世樂。不好外道。経書手筆。亦復不喜。親近其人。及諸悪者。若屠兒。若畜猪羊。鶏狗。若獵師。若銜売女色。是人心意質直。有正憶念。有福徳力。是人不為。三毒所惱。亦不為嫉妬。我慢。邪慢。増上慢。所惱。是人少欲知足。能修普賢之行。

『妙法蓮華経』普賢菩薩勸発品第二十八

日蓮聖人の御遺文の中にも、二箇所出て参りますが、御真蹟の残っているものではないかもしれません。

但師なりとも誤ある者をば捨べし。又捨ざる義も有べし。世間仏法の道理によるべき也。末世の僧等は仏法の道理をばしらずして、我慢に著して、師をいやしみ、檀那をへつらふなり。但正直にして少欲知足たらん僧こそ、真実の僧なるべけれ。

（『曾谷殿御返事』）

譬ばよき火打とよき石のかどとよきほくそと此三寄合て火を用る也。祈も又如是。よき師とよき檀那とよき法と、

此三寄合て祈を成就し、国土の大難をも払ふべき者也。よき師者指たる世間の失無して、聊のへつら（詔）ふことなく、少欲知足にして慈悲有ん僧の、経文に任せて法華経を讀持て人をも勧めて持たせん僧をば、仏は一切の僧の中に吉第一の法師也と讃られたり。

（『法華初心成仏鈔』）

法華経、日蓮思想の本筋は「少欲知足」であるのでしょうか。「少欲知足」を説くことが、現代日本に於いてどれほど有効なのでしょう。

高野山真言宗の松長有慶管長が、平成二十四年の九月八日に、高野山大学で「仏教と科学」と題して講演をした際、理趣経の「大欲清浄」ということばを紹介したそうです。これは、大いに参考になるのではないかと思われま

す。理趣経の中に「大欲清浄」という言葉。現代人の肥大していく欲望を抑える「小欲知足」じゃないといかんといいますが、ここまで肥大化した欲望。小欲なんて、自己コントロールできる教育を受けてないし、という状態の人たちが多いわけです。弘法大師は「小欲知足」ではなくて「大欲清浄」だといっている。欲望はもつと大きく育てていけと。欲望は小さくするよりももつと大きくしろと。それは人間の生きる活動の根源であるといわ

けです。

大欲というのは、水を飲むよりもジュース飲むほうがおいしいとか、それよりも酒を飲むほうがおいしいと、グレードアップしていくんじゃない。質が変わるといふこと。小欲の寄せ集めが大欲になるんじゃない。小さな欲の質が変わって大欲にかわるのです。質が変わるといふのは何かというと、自分自身の欲望を捨てるということ。自分自身の欲望が肥大化したらこれは醜い。それを人様のための欲望の中に変えていけ。他人のために欲を

働かすということですよ。

現代社会に対して提言するべき点が非常にたくさんある。密教というのはそういう宗教です。スティックにどんどん切り詰めていくのではなく、どんどん本来の人間のエネルギーを育て上げていけよ。育て上げていくのは自分自身のためではなく他人の為に育てていくんだとこういう形になるというわけですね。

弘法大師の教えの中には、人間だけが偉いのではなくて動物植物とも皆、命が繋がっているというものがあります。石ころまでも自分と同じ命が繋がっているという考え方。山川草木が繋がっている。これは平安仏教の中にしかない考え方です。

平成二十四年九月八日「高野山大学フジキン小川修平記念講座」

松長有慶高野山真言宗管長「仏教と科学」

大前研一からの引用文の中に「アンビション」という言葉がありました。「稼ぐ力」というのは余り筆者の趣味ではありませんが、「アンビション」には惹かれるものがあります。

個人的なことですけれども、筆者は、少年期、北海道大学の創設者であるクラーク博士の言葉として知られる「ボイズ・ビー・アンビシャス」「少年よ、大志を抱け」という言葉がとても好きでした。中学生になって英語を学んでみると、「アンビシャス」「アンビション」という言葉は「野心」という意味だということ。「大志」だと思っていたら、「野心」だということで、ちょっとショックを受けた記憶があります。

この、クラーク博士の言葉は、昭和三十三年に「朝日新聞」の「天声人語」に取り上げられた稲富栄次郎という方の書物に紹介されているのだそうです。

この数年「Boys be ambitiousに続く言葉について知りたい」という問い合わせが多くなった。調べてみると、高校や中学の教科書の中にも次のような言葉をのせたものがあるようである。

『Boys, be ambitious! Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be.』

この言葉がこのように広まったのは、昭和三十九年三月十六日の朝日新聞「天声人語」欄によるものと思われる。「天声人語」はその出典として稲富栄次郎著「明治初期教育思想の研究」（昭十九）をあげ、さらに次のような訳文を添えている。「青年よ大志をもて。それは金銭や我欲のためにはなく、また人呼んで名声という空しいもののためであってはならない。人間として当然そなえていなければならぬあらゆることを成しとげるために大志をもて」

BBAが記録の上で最初にあらわれたのは、現在知られる限りでは、明治二十七年予科生徒安東幾三郎（のち日伯拓植取締役）が農学校の学芸会機関誌「恵林」に掲載した「ウイリアム・エス・クラーク」なる文章中である。その十三号に安東は書いている。「暫くにして彼悠悠々として再び馬に跨り、学生を顧みて叫んで曰く、『小供等よ、此老人の如く大望にあれ』（Boys, be ambitious like this old man）と。一鞭を加へ塵埃を蹴て去りぬ」このlike this old manは意味深重であるが、別れの言葉としては一寸芝居がかっている。それに五十歳を少し過ぎたばかりのクラーク博士が自分のことをold manと考えていたかどうか。それはともかく語呂の点からみても、まだこの言葉は学生間に充分に定着していなかったことを物語るように思われる。

秋月俊幸（北海道大学図書館報『楡蔭』No.29）

「青年よ大志をもて。それは金銭や我欲のためではなく、また人呼んで名声という空しいもののためであつてはならない。人間として当然そなえていなければならぬあらゆることを成しとげるために大志をもて」。

この言葉がクラーク博士の言葉であつたのかどうかという詮索は今は措きますけれども、法華経や日蓮聖人の思想というのは、「少欲知足」よりも、こちらの方向性を有するものではないでしょうか。

「少欲知足」を強調するというのは、日蓮門下のあり方として本当はどうなのか。もちろん、このことはもつと丁寧に議論しないとならないことですけれども、「ざとり世代」と呼ばれるような、そうした若い人たちが増えてきている中で、真剣にこの問題を考え直してみるべきではないか、と考える次第です。